

〔箋注倭名類聚抄七鳥名〕按須須其鳴聲、米群之義、須須美轉語耳、說文、雀、依人小鳥也、埤雅、雀賦曰、頭

如類、蒜、目如擘椒、李時珍曰、雀處々有之、羽毛斑褐、頰皆黑、尾長二寸許、爪距黃白色、躍而不步、其

視驚瞿、其目夜盲、其卵有斑、

〔類聚名義抄九雀〕雀 音爵、ス、ミ、

〔伊呂波字類抄須動物〕雀 ス、ハ、メ、ス、ハ、ミ、禮云、雀入大水爲蛤也、

〔和爾雅六禽鳥〕雀 同 黃雀 黃口雀 同 鶩 雀子 白丁香

〔八雲御抄三下雀〕雀 むら すゝめいろといふは、夕のそら也、

〔藻鹽草十雀〕雀

むら雀 雀色 ゆふべの 雀か くれ 眞木の目の出て、いま 破車といふ事 すいめのよりあひの家

うがつともいへり、 とまり雀 雀なく 雀のこゑ 雀かたよる 羽をわかみ 雀のひな

のてなれぬ ねぐらもとむるむら雀

〔日本釋名中雀〕雀 ス、ミ 此鳥の性おどりてす、み行、故にす、みと云、

〔東雅禽十雀〕雀 ス、ハ、メ 古事記に、天若彦の身まかりし時、雀を確女 ウサメ となせしといふ事あり、ス、ハ、メ

とはウスメといふ語の轉せしに似たり、されど舊事紀には確春女 ツキメ と云るされ、日本紀には春女

とも見えたれば、其云ひつぎし所同じからずと見えたり、或はス、ハ、メとは猶サ、といふが如く、其

小しきにして小きを云ひしも知るべからず、メといひしは、古俗鳥を呼てメと云ひしこと少か

らず、鶉をヒメといひ、鶉をシメといひ、鷗をカモメといひ、燕をツバクラメといひしが如き是也、

〔閑田耕筆三〕雀字、大雀尊 オホノセノ と古事記に書れしごとく、さ、は古訓なるべし、さ、とは少き事也、本草

綱目時珍說、上、少は其容につき、雀は短尾の鳥を稱する字なれば、合せて雀字を作るといへり、後

世さ、と稱へず、すゝめと訓ても少き事に用ゆ、すゝめうりはひめうりともいひて、王瓜の類也、